

---

# 立看板

いえやす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

立看板

### 【ZPDF】

Z6461D

### 【作者名】 いえやす

### 【あらすじ】

雨の日、わたしは運転していた車を看板にぶつけてしまいました。

まつたく嫌な雨ですねえ。

そういえばあの日も雨が降っていたんですよ。

ちょうど一週間くらい前でしたか。

わたしはやっぱり仕事で、車で山の中を走っていたんです。辺りは暗くなりはじめていたんですが、慣れた道でしたし。面倒でヘッドライトを点けずに運転を続けていたんです。

他の車もいませんでした。

それで、少し急なカーブを曲がったときでした。

急に視界に黄色い丸いものが飛び込んできました。

傘でした。子供用の。

慌ててブレーキを踏んだんですけど、間に合いませんでした。車はその黄色いものにぶつかって、少し引きずつてから止まりました。

わたしは止まった車の中で暫く呆然としてしまいました。

それから、怖かったんですが、車を降りて確認してみたんです。

そしたらなんのことは無い。

ぶつかったのは立看板だつたんです。

傘をさした小学生の絵の描かれたやつ。

ほらよく通学路にあるでしょう。今はあまりみかけませんけど。運転手にここが通学路だつてことを知らせるための看板。

本物の小学生じゃなくてほつとしました。

そのまま行つてしまおつしたんですが、看板は完全に壊れてしまつて。

元のように立てて置いておくことができません。

それでふと心配になつたんです。

これが見つかつたらなにかの違反になるんじやないかと。

看板にぶつかつてどれくらいの違反になるかは分かりません。

でも、仕事柄免許の点数はいつもぎりぎりでしたから。

悪いこととはわかつていたんですが、その壊れた看板を隠してしまおうと考えました。

その日の目的地は山の奥でした。

近くに人目に触れないように「山」を捨てられる穴があつたのを思い出したんです。

そうなんです。すいません。

本当に悪いことは思いましたけど、その看板を穴に捨てました。免許停止になると、車を運転できなくなると、仕事がまったくできなくなるんです。

本当に困るんです。

妻は病気になつたし。息子のことだつてあるし。すいません。話がそれましたね。

そんなことがあって多分一、三日後だつたと思つんですが。やつぱり雨の日の夕方。

その時はさすがにライトを点けていましたけど、いきなりでした。人通りのないと思っていた通りで、あの時と同じ黄色い傘が目の前に現れたんです。

もちろんすぐにブレーキを踏みました。

ぶつかつた衝撃がなかつたんで、今度は間に合つたと思つて安心したんです。

でも、そこにはだれもいませんでした。

なにもありませんでした。

そのときはわたしの見間違いだと思つたんです。

でもそれからでした。

黄色い傘の幻が、あの看板の幽霊が現れるようになつたのは。

雨の日、辺りが暗くなつて人通りのない道を走らせていると、車の前に必ず黄色い傘が現れるようになつたんです。

でもおかしな話ですよねえ。

看板ですよ。壊れた看板。

あんなものが幽霊になるなんて、誰が思いますか？  
いったいどんな未練があるというんでしようねえ。

……ああ、雨、やみそりにありませんねえ。

明日も一日雨でしょうかねえ？

いえ、すいません。明日の仕事の段取りが気になってしまって。  
雨が降ると道が込むんですねえ。

ええと、なんの話でしたつけ？

そうです。だから看板です。

ほら今はもう梅雨に入っているじゃないですか。

雨でない日の方が少ないくらいで。

だから黄色い傘をさしたあの看板の幽霊も、ほとんどの毎日のよう  
に現れています。

最初は驚いてその度にブレーキを踏んでいたんです。

けど、しばりべりする内に看板の幽霊にもすっかり慣れてしましま  
した。

黄色い傘が出てきても、またか、と思ひへりで。

それで、今日もそうだったんですね。

この雨で道がすっかり渋滞しちゃって、約束の時間に間に合わ  
ないことが確実でした。

だからあせつてました。

それでついスピードを出し過ぎちゃったんですねえ。

黄色い傘が出てきたのはわかったんですね。

でも、どうせ看板の幽霊だと思つて、ブレーキを踏まなかつたん  
です。

……だけど、今日はは幽霊じゃなかつたみたいですねえ。  
本物の看板にぶつけてしまつたんですねえ。またわたし。  
わたしの違反は重いんですかねえ？

仕事に障りありますかねえ？

看板にぶつかつただけなんですよ。

ええ、看板だったんですね。この前のも今日のも。

それだけなんですよ。

ねえ、おまわりさん。

えつ？ あそこの大を調べたんですか？

ああ、そうなんですか……。

すいません。

わたし、ひとつ嘘ついてました。

そうなんです。

ぶつかって捨てた看板はひとつだけじゃなかつたんですね。

5枚。いや6枚だつたかな？

こつちが急いでいるときに、いつもいつも田の前にうしめりあらじてるから。

つい、邪魔だと思つてしまつて……。

これでもすゞく氣をつけたつもりなんですよ。

でもあの看板、夕方になると町中の通りに溢れているじゃあないですか。

ぶつかつたつて仕方が無いと思いませんか？

ねえ。

どうかしましたか？ おまわりさん。

どうして今わたしの息子のことなんか聞くんですか？

そうですよ。警察の方が一番ご存知でしちゃう？

息子はまだ見つかっていないんです。

わたしが最初に看板にぶつかつた雨の日から。小学校から帰る途中で行方不明になつたきりで。妻は心配のあまり身体を壊して入院してます。

本当ですか？

息子が見つかつたんですか？

どこにいるんですか？

無事なんですか？

教えてくださいよ。おまわりさん。

どうしてなんですか？

教えてくださいよ。おまわりさん。

どうして今からあの穴を見にいかなきやいけないんですか？

息子とは関係ないでしょう。あそこの穴は。

そうでしょう？ おまわりさん。

あそこにあるのはただの看板です。

壊れかけの看板だけです。

(後書き)

一応、この人は自分の息子を車で轢いてしまったショックから、傘をさして歩いている小学生を看板と思い込むようになった、という落ちなんですが、ちょっとわかりにくいかもしません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6461d/>

---

立看板

2010年10月8日15時06分発行